

教頭の小部屋

2021.1.15
との5



阪神淡路大震災

あの震災から26年が経つ。みんなが生まれる前の震災なので、今日の防災訓練も地震の怖さや訓練の大切さについて、君たちはいまいちピンときていないかもしれない。あの地震で神戸の街が崩れ去り、たくさんの命がなくなった。26年が経ち自分はおっちゃんになってしまったが、あの揺れは生々しく記憶に残っている。そして、あのやり場のない憤りは決して忘れない。

震災当日の朝、私はワープロに向かい、大学の卒論を書いていた。カタカタと小さな揺れが始まり、その後、突き上げるような大きな揺れが起こった。大きな揺れがおさまり、何かかと思ってテレビをつけたが、数分後に停電。絶え間なく起こる余震に不安もあったが、車に乗りエンジンをかけ、ラジオをつけた。ラジオからは、大きな地震が起こったことと、余震に注意してくださいと、アナウンサーが急ぎ立てたような声で、何度も繰り返していた。朝日が昇り、夜が明けたところに電気が復旧。家に戻りテレビをつけると、崩壊し、黒煙を吐く神戸の街が目飛び込んできた。

3日後、アルバイトの関係で神戸の街に入る。横倒しになった阪神高速道路。倒壊しかけているJR六甲道の駅ビル。ほぼ寝る時間もなく3日間、たくさんの現場で復興工事の仕事をした。体を動かしながら周りに目をやると、今にも崩れ落ちそうなビルや家屋、全焼した車や家、「この下にまだ人が埋まっています。」と書き殴られた張り紙。いたるところに供えられた花や細い煙を上げる線香…。仕事のつらさより、神戸の惨状に心が押しつぶされ、涙を流しながら仕事をしたことを覚えている。1週間ほどして、身の回りに大きな被害がなかった私は、下宿先に帰り落ち着いた生活に戻った。深夜番組はバラエティー番組を放映し、何事もなかったように流れる時間もあったが、テレビ番組が終わった深夜、行方不明者の名前が何時間も何時間も、映画のエンドロールのように流れ続けていた。見知った名前が流れないかと気になって、何時間もテレビ画面から目が離せなかった。また、たくさんの命が失われたという事実を突きつけられ、現実に戻された。

「生きたい。」と願いながらも命を失った方の無念さや、大切な人の命を失った方に比べればたいしたことはないが、身の回りに大きな被害がなかった私にも、震災は大きな傷を残した。また、命について深く考えたこともなかった私に、亡くなった方の命や生きている自分の命の重たさが突き付けられたのだ。未だに地震が起こると、鳥肌が立つ。亡くなった命の分も、自分が精一杯生きなければとも思う。

今日の防災訓練・黙とうに君たちは何を思ったのか。毎年毎年繰り返される行事とは、とらえてほしくない。

自分の命を守る。自分の命を大切にする。人の命を大切にする。そんな大人になってほしい。

